

源氏物語

御法

紫式部

青空文庫

なほ春のましろき花と見ゆれどもとも
に死ぬまで悲しかりけり
(晶子)

紫夫人はあの大病以後病身になって、どこということもなく始終煩^{わづら}っていた。たいした悪い容体になるのではなかったが、すぐれない、同じような不健康さが一年余りも続いた今では目に立って弱々しい姿になったことで、院は非常に心痛をしておいでになった。しばらくでもこの人の死んだあとのこの世にいるのは悲しいことであろうと知っておいでになったし、夫人自身も人生の幸福には不足を感じるところとでもなく、気がかりな思いの残る子もない人なのであるから、こまやかに思い合った過去を持っていて自分の先に欠けてしまうことは、院をどんなに不幸なお心持ちにすることであろうという点だけを心の中で物哀れに感じているのであった。未来の世のためと思って夫人は功德になることを多くしながらも、やはり出家して今後しばらくでも命のある間は仏勤めを十分にしたいということを始終院へお話しして、夫人は許しを得たがっているのであるが、院は御同意をあそばさなかった。それは院御自身にも出家は希望していられることなのであるが、夫人が

熱心にそうしたいと言っている時に、御自身もいっしょにそれを断行しようかというお心もないではないものの、いったん仏道にはいった以上は、仮にもこの世を顧みることはしたくないというお考えで、未来の世では一つの蓮華れんげの上に安住しようと約束しておいでのなる御夫婦であつても、この世での出家後の生活は全然区別を立てたものにせねばならぬという御本意から、こうして病弱な身体からだになつてしまつた夫人と、離れておしまいになることは気がかりで、悟道にはいつた新生活も内から破れていくことを院は恐れて躊躇ちゆうちよをしておいでになるのである。結局は深い考えもなく簡単に出家してしまう人よりも、道にはいることが遅れるわけである。院の同意されぬのを見ぬ顔にして尼になつてしまうことも見苦しいことであるし、自分の心にも満足のできぬことであらうからと思つて、この点で夫人は院をお恨めしく思つた。また自分自身も前生の罪の深いものであらうと不安がりもした。以前から自身の願果がんたしのために書かせてあつた千部の法華經ほけの供養を夫人はこの際することとした。自邸のような氣のする二条の院でこの催しをすることにした。七僧の法服をはじめとして、以下の僧へ等差をつけて纏頭てんとうにする僧服類をことに精撰して夫人は作らせてあつた。そのほかのすべてのことにも費用を惜しまぬ行き届いた仏事の準備ができていたのである。内輪事うちわのように言つていたので、院はみずから計画に参加あそ

ばさなかつたが、女の催しでこれほど手落ちなく事の運ばれることは珍しいほどに万事の
 ととのつたのをお知りになつて、仏道のほうにも深い理解のあることで夫人をうれしく思
 召した院は、御自身の手ではただ来賓を饗^{きやう}応^{おう}する座敷の装飾その他のことだけをおさ
 せになつた。音楽舞曲のほうのことは左大將が好意で世話をした。宮中、東宮、院の^{きやうぎ}后の
 宮、中^{ちゆうぐう}宮をはじめとして、法事^{ほふえ}へ諸家からの誦^{ずき}經^{きやう}の寄進、捧^{ささ}げ物なども大がかりな
 ものが多いばかりでなく、この法会^{ほふえ}に志を現わしたいと願わない世人もない有様であつた
 から、華麗な仏会の式場が現出したわけである。いつの間にこの大部の経巻等を夫人が仕^し
 度^{たく}したかと参列者は皆驚いた。長い年月を使つた夫人の志に敬服したのである。花散里^{はなちるさと}
 夫人、明石^{あかし}夫人なども来会した。南と東の戸をあけて夫人は聴聞の席にした。それは寢殿
 の西の内蔵^{うちぐら}であつた。北側の部屋^{へや}に各夫人の席を襖^{からかみ}子だけの隔てで設けてあつた。
 三月の十日であつたから花の真盛^{まつさか}りである。天気もうららかで暖かい日なので、快^み
 て御仏^{みほとけ}のおいになる世界に近い感じもすることから、あさはかな人たちすらも思わず
 信仰にはいる機縁を得そうであつた。薪^{たきぎ}こる（法華^{ほけ}経はいかにして得し薪こり菜摘み水汲^く
 みかくしてぞ得し）歌を同音に人々が唱える声の終わつて、今までと反対に式場の静まり
 かえる気分は物哀れなものであるが、まして病になつてゐる夫人の心は寂しくてならな

った。明石夫人の所へ女王によおうは三の宮にお持たせして次の歌を贈った。

惜しからぬこの身ながらも限りとて薪たきぎ尽きなんことの悲しさ

夫人の心細い気持ちに共鳴したふうのものを返しにしては、認識不足を人からそし譏られることであろうと思つて、明石はそれに触れなかった。

薪のりこる思ひは今日を初めにてこの世に願ふ法のりぞはるけき

経声も楽音も混じつておもしろく夜は明けていくのであつた。朝ぼらけの靄もやの間にはいろいろな花の木がなお女王の心を春に惹ひきとどめようと絢爛けんらんの美を競つていたし春の小鳥のさえずりも笛の声に劣らぬ気がして、身にしむこともおもしろさもきわまるかと思われるころに、「陵王りょうおう」が舞われて、殿上の貴紳たちが舞い人へ肩から脱いで与える纏て頭んどうの衣服の色彩などもこの朝はただ美しくばかり思われた。親王がた、高官らも音楽に名のある人はみずからその芸を惜しまずこの場で見せて遊んだ。上から下まで来会者が歓

樂に酔っているのを見ても、余命の少ないことを知っている夫人の心だけは悲しかった。

昨日は例外に終日起きていたせいか夫人は苦しがつて横になっていた。これまでこうしたおりに必ず集まつて来て、音楽舞樂の何かの一役を勤める人たちの容貌ようぼうや風采ふうさいにも、その芸にも逢あうことが今日で終わるのかというようなことばかりが思われる夫人であつたから、平生は注意の払われない顔も目にとまつて、少しのことにも物哀れな気持ちが誘われて来賓席を夫人は見渡しているのであつた。まして四季の遊び事に競争心は必ずあつても、さすがに長くつちかわれた友情というもののあつた夫人たちに対しては、だれも永久に生き残る人はないであろうが、まず自分一人がこの中から消えていくのであると思われるのが女王の心に悲しかった。宴が終わつてそれぞれの夫人が帰って行く時なども、生死の別れほど別れが惜しまれた。花散里夫人の所へ、

絶えぬべき御法みのりながらぞ頼まるる世々にと結ぶ中の契りを

と書いて紫の女王は送つた。

結びおく契りは絶えじおほかたの残り少なき御法なりとも

これは返事である。供養に続いて不斷の読経どきよう、懺法せんぽうなどもこの二条の院で院はおさせになるのであった。祈禱きとうは常におさせになつていたが、たいした効果も見えないために、わざわざ遠い寺々などでさせることにもお計らいになった。

夏になると夫人は暑氣のためにも死ぬようになることが多かった。病名も定まらぬ程度のものであるが、ただ衰弱がひどかった。堪えがたい苦しみをするというのでもない。女房たちの心にも、どうおなりになるのであらう、このまま危篤になつておしまいになるのではなからうかという不安が生じてきて、惜しく悲しくばかりそれらの人々も思つて歎いていた。こんなふうであつたから院は中宮を御所から二条の院へ退出おさせになった。当分東の対たいにお住みになるはずであつたから、いったんこの西の対へおはいりになることに、お迎えの儀式なども定例どおりにしていながらも、この宮のますますお栄えになる未来の日までを見ずに終わるかというように夫人は悲しんだ。お供をして来た役人たちの姓名の披露ひろうされる時にも、だれがいる、かれも来ていると、女王は深く耳にとまる気がした。高官たちも多数に来ていたのである。しばらくぶりに、実母子以上の愛情が相互にあ

る二人の女性はしめやかに語り合っておいでになった。院がはいっておいでになったが、
「今夜は巢を追われた鳥のようでかわいそうな私はどこかで寝ることにしよう」
と言つて、他の室へ行つておしまいになった。起きていた夫人の姿を御覧になったこと
がおうれしそうであつたが、それはしいてよいように見てみずから慰めておいでになるの
にすぎないのである。

「離れた所では、こちらからあちらへ歩いてお帰りになることがたいへんですし、私もま
たあちらへ上がることはもうできなくなっていますから」

と夫人は言つていて、中宮はしばらくこの病室のあるほうの対におとどまりになること
になった。明石夫人もこちらへ来てしんみりとした会話が日々かわされた。女王の心の中
では頼みたく、言つておきたく思うことが幾つかあつたが、賢そうに死後のことを今から
言うように取られるのを恥じて、そうした問題には触れないのであつた。ただ人生のはか
なさをおおように、言葉少なに、しかも軽々しくはなしに話すのが、露骨に死期の近いこ
とを言うよりもどんなに心細い気持ちでいるかを思わせた。女王は孫である宮たちを見て
も、

「あなたがたがどうおなりになるだろうと、将来が見たいような気がしましたのも、私の

ようにつまらない者でいながら、知らず知らず命を惜しんでいたわけでしょうか」

こんなことを言つて涙ぐむその顔が非常に美しかった。なぜそんなふうにはばかり感ぜられるのであらうとお思いになつて、中宮はお泣きになった。遺言のようにはせず話の中な
どで時々、

「長く私に仕えてくれました人たちの中で、たいした身寄りのないようなかわいそうなだ
れだれなどを、私がいなくなりましたあとで、あなたから氣をつけてやってください」

などというほどにしか死後のことは言わないのである。

病室で読経ときよつの始められる日になつてから中宮は東の対へお移りになった。三の宮は幾人
もの宮様がたの中にことに愛らしいお姿でそばへ遊びにおいでになるのを、病苦の薄らい
だ時などに女王は前へおすわらせして、女房たちの聞いていないのを見ると、

「私がいなくなりましたら、あなたは思い出してくださるでしょうね」

などと言うのであつたが、宮は、

「恋しいでしょう。私は御所の陛下よりも中宮様よりもお祖母ばあ様が好きなんだ。いらつし
やらなくなったら私は悲しいでしょうよ」

とお言いになつて、目をこすつて涙を紛らしておいでになる宮のお姿のおかわいたため

に、夫人は微笑をして見ているのであったが、目からは涙がこぼれた。

「あなたが大人におなりになったら、ここへお住みになって、この対の前の紅梅と桜とは花の時に十分愛しておながめなさいね。時々はまだ仏様へもお供えになってね」

と言うと、宮はおうなずきになりながら、夫人の顔を見守っておいでになったが、涙が落ちそうになったので、立つてお行きになった。手もとでお育てしたために夫人はこの宮と姫君にお別れすることをことに悲しく思っていた。

ようやく秋が来て京の中も涼しくなると、紫夫人の病氣も少し快くなったようには見えるのであるが、どうかするとまたもそのような容体にかえるのであった。まだ身にしむほどの秋風が吹くのではないが、しめつぽく曇る心をばかり持って夫人は日を送った。中ちゆう

宮は御所へおはいりにならず、もう少しここにおいでになるほうがよいことになるでしょうと女王はお言いたかったのであるが、死期を予感しているように賢がって聞こえぬかと恥ずかしく思われもしたし、御所からの御催促の御使いみつかのひっきりなしに来ることに御遠慮がされもして、おとどめすることも申さないでいるうちに、夫人がもう東の対へ出て来ることができないために、宮のほうからそちらへ行こうと中宮が仰せられた。

失礼であると思ひ心苦しく思いながらも、お目にかからないでいることも悲しくて、西

の対へ宮のお居間を設けさせて、夫人はなつかしい宮をお迎えしたのであった。夫人は非常に瘦^やせてしまったが、かえってこれが上品で、最も艶^{えん}な姿になったように思われた。これまであまりにはなやかであつた盛りの時は、花などに比べて見られたものであるが、今は限りもない美の域に達して比較するものはもう地上になかった。その人が人生をはななく、心細く思っている様子は、見るものの心をまでなんとなく悲しいものにさせた。

風がすぐ吹く日の夕方に、前の庭をながめるために、夫人は起きて脇^{きょうそく}息によりかかつているのを、おりからおいでになつた院が御覧になつて、

「今日はそんなに起きていられるんですね。宮がおいでになる時にだけ気分が晴れやかになるようですね」

とお言いになつた。わずかに小康を得ているだけのことに喜んでおいでになる院のお気持ち、夫人には心苦しくて、この命がいよいよ終わつた時にはどれほどお悲しみになるであろうと思うと物哀れになつて、

おくと見るほどぞはかなきともすれば風に乱るる萩^{はぎ}の上露

と言った。そのとおりに折れ返った萩の枝にとどまっているべくもない露にその命を比べたのであったし、時もまた秋風の立つている悲しい夕べであったから、

ややもせば消えを争ふ露の世に後れ先きだつ程^{ほど}へずもがな

とお言いになる院は、涙をお隠しになる余裕もないふうでおありになった。宮は、

秋風にしばし留まらぬ露の世をたれか草葉の上とのみ見ん

とお告げになるのであった。美貌^{びぼう}の二女性が最も親しい家族として一堂に会することが快心のことであるにつけても、こうして千年を過ごす方法はないかと院はお思われになるのであったが、命は何の力でもとどめがたいものであるのは悲しい事実である。

「もうあちらへおいでなさいね。私は気分が悪くなつてまいりました。病中と申してもあまり失礼ですから」

といった、女王は几帳^{きちよう}を引き寄せて横になるのであったが、平生に超えて心細い様子

であるために、どんな気持ちがするのかと不安に思召して、宮は手をおとらえになつて泣く泣く母君を見ておいでになつたが、あの最後の歌の露が消えてゆくように終焉の迫つてきたことが明らかになつたので、誦經の使いが寺々へ数も知らずつかわされ、院内は騒ぎ立つた。以前も一度こんなふうになつた夫人が蘇生した例のあることによつて、物怪のすることかと院はお疑いになつて、夜通しさまざまのことを試みさせられたが、かいもなく翌朝の未明にまつたこと切れてしまつた。

宮もお居間にお歸りにならぬままで臨終に立ち会えたことを、うれしくも悲しくも思召した。御良人も御娘も、これを人生の常としてだれも経験していることとお思いになれないで、言語に絶した悲しみ方をしておいでになるのである。二条の院の中は絶望して心を取り乱した人ばかりになつた。院はお心の静めようもないふうで、大将を几帳のそばへお呼び寄せになつて、

「もうだめになつたことは確かなようだ。長く希望していた出家のことをこの際に遂げさせてやらないのは惨酷なように思われるが、加持に来ていた僧たちも誦經の僧たちも皆することをやめて歸つたとしても、少しは残っているのもあらうから、この世の利益はもう必要がなくなつた今では冥土のお手引きに仏をお願いすることにして、髪を切つて尼に

することをそのだれかにさせてくれ。相当な僧ではだれが残っているか」

こうお言いになる御様子にも、自制しておいでのなるのであろうが、御血色もまったくないので、涙がとまらず流れているお顔を、ごもつともなことであると大將は悲しく見た。

「物怪などが周囲の者を驚かすために、そうしたことをすることもあるのですが、絶望の御状態とはそうしたわけではないのでございましょうか。それでございましたら、ただ今承りましたことは結構なこととございまして、一日一夜でも道におはいりになっただけでことは報いられるでしょうが、しかしもうまったくお亡くなりになったのでございましたら、死後のお髪ぐしの形を変えますだけのことがあの世の光にはならないでしょう。そして眼めで見る遺族たちの悲しみだけが増大することになるだけのことでございますから、私はいかがかと存じます」

と大將は言つて、忌中をこの院でこもり続けようとする志のある僧たちの中から人選して念仏をさせることを命じたりすることなども皆この人がした。今日までだいそれた恋の心をいだくというのではなかったが、どんな時にまたあの野分のわきの夕べに隙見すきみを遂げた程度にでも、また美しい継母が見られるのであろう、声すらも聞かれぬ運命で自分は終わるの

であろうかというあこがれだけは念頭から去らなかつたものであるが、声だけは永遠に聞かせてもらえない宿命であつたとしても、遺骸^{いがい}になつた人にせよもう一度見る機会は今の時以外にあるわけもないと夕霧は思うと、声も立てて泣かれてしまふのであつた。

あるだけの女房は皆泣き騒いでいるのを、

「少し静かに、しばらく静かに」

と制するようにして、ものを言う間に几帳の垂れ絹を手で上げて見たが、まだほのぼのとはじめたばかりの夜明けの光でよく見えないために、灯^ひを近くへ寄せてうかがうと、麗人^{にようおう}の女王は遺骸になつてなお美しくきれいで、その顔を大将がのぞいていても隠そうとする心はもう残つていなかった。院は、

「このとおりになんぞ変わつたところはないが、生きた人でないことだけはだれにもわかるではないか」

こうお言いになつて、袖^{そで}で顔をおさえておいでになるのを見ては、大将もしきりに涙がこぼれて、目も見えないのを、しいて引きあけて、遺骸をながめることをしたがかえつて悲しみは増してくるばかりで、氣も失うのではないかと夕霧はみずから思った。横にむぞうさになびけた髪が豊かで、清らかで、少しのもつれもなくつやつやとして美しい。明る

い灯のもとに顔の色は白く光るようで、生きた佳人の、人から見られぬよう見られぬようと願う心の休みなく働いているのよりも、己おのれをあやぶむことも、他を疑うこともない純粹なふうで寝ている美女の魅力は大きかった。少々の欠点があつてもなお夕霧の心は恍惚こうこつとしていたであろうが、見れば見るほど故人の美貌びぼうの完全であることが認識されるばかりであつたから、この自分を離れてしまうような気持ちのする心はそのままこの遺骸にとどまつてしまうのではないかというような奇妙なことも夕霧は思つた。

長く仕えていた女房の中に意識の確かにあるような者はない状態であつたから、院は非常に悲しい気持ちをしておしずめになつて、遺骸の始末などをあそばすのであつた。昔も愛人や妻の死におあいになつた経験はありになつても、まだこんなことまでも手ずから世話あそばされたことはなかつたから、自身としては空前絶後の悲しみであると見ておいでになるのであつた。紫の女王の遺骸はその日のうちに納棺された。どれほど愛すればとて遺骸は遺骸として葬送せねばならぬのが人生の悲しい掟おきてであつた。

はるばると広い野にあいた場所がないほどにも葬送の人の集まつたいかめしい儀式であつたが、送られた人ははかない煙になつて間もなく立ち昇のぼつてしまつた。当然のことではあるがこれをも人々は悲しんだ。空を歩いているような気持ちで院は人によりかかつて足

を運んでおいでになるのを見ては、あの高貴な御身分でと低級な頭のものさえも御同情して泣かない者はなかった。遺骸の供をして来た女房たちはまして夢の中に彷徨ほうこうしているような気持ちになつていて、車から転ころび落ちそうに見えるのを従者たちは扱いかねていた。昔、大将の母君の葵夫人あおいの葬送の夜明けのことを院は思い出しておいでになつたが、その時はなお月の形が明めい瞭りように見えた御記憶があつた。今は心も目も暗闇くらやみのうちのようないのちの夜明けのことである。女王は十四日に薨こうきよ去したのであつて、これは十五日の夜明けのことである。

はなやかな日が上つて、野原一面に置き渡した露がすみずみまできらめく所をお通りになりながら、院はいつそうこの時人生というものをいとわしく悲しく思召して、残つた自分の命といつても、もう長くは保ちえられないのではないであらうから、こうした苦しみを見る時に、昔からの希望であつた出家も遂げたいとしきりに思われになるのであつたが、気の弱さを史上に残すことが顧慮されて、当分はこのままで忍ぶほかはないと御決心はあそばされても、なお胸の悲しみはせき上がってくるのであつた。

夕霧も、紫夫人の忌中を二条院にこもることにして、かりそめにも出かけるようなことはなく、明け暮れ院のおそばにいて、心苦しい御悲歎ひたんをもつともなことでであると御同情を

して見ながら、いろいろと、お慰めの言葉を尽くしていた。

風が野分のわきふうに吹く夕方に、大將は昔のことを思い出して、ほのかにだけは見る事ができた人だったのにと、過ぎ去った秋の夕べが恋しく思われるとともに、また麗人の終わりの姿を見て夢のようであったことも人知れず忍んでいると非常に悲しくなるのを、人目に怪しまれまいとする紛らわしには、阿弥陀仏あみだぶつ、阿弥陀仏と唱えて数珠じゆずの緒を繰ることをした。涙の玉も混ぜてである。

いにしへの秋の夕べの恋しきに今はと見えし明け暗ぐれの夢

この夢の酔いごこちは永遠の悲しみの澱おりを大將の胸に残したようである。りっぱな僧たちを集めて忌籠いみごもりの念仏をさせることは普通であるが、なおそのほかに法華經ほけをも院がお読ませになっているのも両様の悲哀を招く声のように聞こえた。

寝ても起きても涙のかわくまもなく目はいつも霧におおわれたお気持ちで院は日を送っておいでになった。一生を回顧してごらんになると、鏡に写る容貌ようぼうをはじめとして恵まれた人物として世に登場したことは確かであるが、幼年時代からすでに人生の無常を悟ら

せられるようなことが次々周囲に起こって、これによって仏道へはいれと仏の促す^{うなが}のをし
いて知らぬふう^うに世の中から離脱することのできなかったために、過去にも未来にもこん
なことがあるうとは思われぬ大なる悲しみを体験させられることになった、これほど悲し
みのしずめがたい心を持つている間は、仏の道にもはいることが不可能であろうとみずか
らおあやぶまれになる院は、この心持ちを少しゆるやかにされたいと阿弥陀仏を念じてお
いになった。

忌中の院をお見舞いになるかたがたは宮中をはじめとして、皆形式的ではなくたびたび
の使いをおつかわしになるのであった。仏道から言えばいっさいのことは院の御念頭から
除^のけられてよいわけではあるが、さすがに悲しみにぼけたふうには人から見られたくない、
こうした一生の末になって妻を失った悲しみに堪えないで入道したという名の残ることだ
けははばかっておいでになるために、見えぬ拘束を受けて自由に出家のおできにならぬこ
ともこのごろの悲しみに添った一つの悲しみになった。

太政大臣は人が不幸であるおりに傍観していられぬ性質であつたから、紫夫人というよ
うな不世出の佳人の突然に死んだことを惜しがり、院に御同情してたびたび見舞いの手紙
をお送りした。昔大将の母君が亡^なくなつたのも秋のこのごろのことであつたと思ひ出して、

大臣は当時の悲しみもまた心の中に湧き出してくるのであったが、その時に妹の死を惜しんだ人たちも多くすでに故人になつてゐる、先立つということも、後れるということもたしいた差のない時間のことではないかなどと考えて、もののしんみりと感ぜられる夕方に庭をながめていた。息子の蔵人少将を使いにして六条院へ手紙を持たせてあげた。人生の悲しみをいろいろと言つて、古い親友をお慰めする長い文章の書かれてある端のほうに、

古への秋さへ今のここちして濡れにし袖に露ぞ置き添ふ

という歌もあつた。ちようど院も、過去になつたいろいろな場合を思い出しておいでになる時であつたから、大臣の言う昔の秋も、早く死別した妻のことも皆一つの恋しさになつて流れてくる涙の中で返事をお書きになるのであつた。

露けさは昔今とも思ほえずおほかた秋の世こそつらけれ

悲しいことだけを書いておいては、あまりに弱いことであると批難するであろう、大臣

の性格を知つておいでになる院は御注意をみずからあそばして、たびたび厚意のある御慰問を受けているといつて、悦びよろこの言葉などもお書き加えになるのをお忘れにならなかつた。薄墨色を着ると葵夫人あおいの死んだ時にお歌いになつたその喪服よりも、今度は少し濃い色のを着て悲しみを示された。

どんな幸運に恵まれていても、理由のない世間の嫉妬しつとを受けることがあるものであるし、またその人自身にも驕きょう慢まんな心ができてそのために人の苦しめられる人もあるのであるが、紫の女王という人は不思議なほどの人氣があつて、何につけても渴かつ仰げうされ、ほめられる唯一の瑕きずのない珠たまのような存在であり、善良な貴女きじよであつたのであるから、たいした関係のない世間一般の人たちまでも今年の秋は虫の声にも、風の音にも、また得がたいこの世の宝を失つた悲しみに誘われて、涙を落とさない者はないのである。ましてほのかにでも女王を見たことのある人たちにとって、女王を失つた悲しみはどうてい忘られるものではなかつた。女王が親しく手もとに使つていた女房たちで、たとい少しの間にもせよ夫人に後おくれて生き残つている命を恨めしいと思つて尼になる者もあつた。尼になつてまだ満足ができずに遠く世と離れた田舎いなかへ住居すまいを移そうとする者もあつた。

冷泉院れいぜいの后きさぎの宮も御同情のこもるお手紙を始終お寄せになつた。故人を忍ぶことをお

書きになった奥に、

枯れはつる野べをうしとや亡^なき人の秋に心をとどめざりけん

はじめてわかった気もいたします。

とお書きになったものを、院はお悲しみの中でも繰り返しお読みになって、いつまでもながめておいでになった。趣味の洗練された方として、思うことも書きかわしうる方はまだお一人この方があるとお思ひになって、院は少しうれいの紛れる気持ちをお覚えになりながら涙の流れ続けるためにお筆が進まなかった。

昇^{のぼ}りにし雲井ながらも返り見よわれ飽きはてぬ常ならぬ世に

お返事をお書き了^おえになったあとでもなお院は見えぬものに見入っ^おておいでになった。お気持ち強くあそばすことができずに悲しみにぼけたところがあ^おるよう^おにみずからお認めになる院はもとの夫人の居間のほうにばかりおいでになった。仏像をお据^すえになった

前に少数の女房だけを侍^{はべ}らせて、ゆるやかに仏勤めをあそばす院でおありになった。千年もごいっしょにいたく思^{おぼしめ}召した最愛の夫人も死に奪われておしまいにならねばならなかったことがお気の毒である。もうこの世にはなんらの執着も残らぬことを自覚あそばされて、遁^{とんせい}世の人とおなりになるお用意ばかりを院はしておいでののであるが、人聞きということでもた躊^{ちゆうちよ}躇^{ちよ}しておいでのになるのはよくないことかもしれない。

夫人の法事についても順序立てて人へお命じになることは悲しみに疲れておできにならない院に代わって大將がすべて指図^{さしず}をしていた。自分の命も今日が終わりになるのであらうとお考えられになる日も多かったが、結局四十九日の忌^{いみ}の明けるのを御覧になることになったかと院は夢のように思召した。中^{ちゆうぐう}宮なども紫夫人を忘れる時なく慕っておいでになった。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年1月15日4版を使用しました。

入力：上田英代

校正：柳沢成雄

2003年10月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

御法

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>